

# まんだら通信

第245号 (通巻279号)

平成28年12月 西暦2016年 佛暦2582年 皇紀2676年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## 報恩講

今を去る千二百年余り、四国は讃岐の豪族の佐伯家に神童が生まれましました。お名前を真魚と呼びます。

一族の期待を一身に集め、都の大学に進みます。卒業すれば国家の官僚としてこの上ない名譽と同時に、一族の繁栄が約束されているからです。

国家公務員への道に一生懸命励んでいると思っていた、ご両親の期待と裏腹に、「勉強を進めた結果、世の人々を救うには仏教以外には見当たらない。」という理由で退学してしま

まいます。

この時の宣言文とも言わべき書物は『聾瞽指帰』という戯曲の形で、自筆は国宝として残っております。

その頃は出家も国の許可が要りましたが、お大師さまが選んだ道は『私度僧』でした。

そして熊野、大峰、吉野というような、獣しか行かない山の頂上や岩屋などにもつて座禅したり、四国の海岸の岩屋で『虚空蔵求聞持法』をひたすら称え続けたり、という気の遠くなるような修行をお続けになりました。

そのような中、あらゆるお経を読みました。納得できるお経に巡り合うことが出ませんでした。ある時夢の中に「汝が求めている経典は、大和の久米寺にあり。」という仏さまのお告げがあり、『大日経』を手にすることが出来ました。

然し良く読んでみると、本当に理解するためには師匠と弟子が対面で受け渡ししなければ、本当の姿は伝わらない事が分かったのです。

そのためには中国に渡り、相応しいお師匠様に教えを請うしかないと言金集めに乗り出します。留学の年数は二十年と決まっていますから、それは想像できない莫大な金額になった筈です。

そして出航間際の遣唐使船に乗り込み中国に向かいます。この時の遣唐使船は四隻だったそうですが、天台宗の最澄さんは国費の短期留学でした。

お大師さまは、長安の青龍寺、惠果和尚を訪ねます。和尚は「あなたが来ることを今日か明日かと心待ちにしています。私の余命は僅かです。私が受け継いでいる

総ての法を伝えますから、早くお国に帰ってこの勝れた教えを広めるように」といつて、お釈迦さま以来の仏法をお大師さまに伝え終わると、程なく遷化されました。お大師さまは千人とも三千人ともいわれるお弟子を代表して、碑文をしたためました。この碑文はお大師さまの全集に残っているそうですが、昨日今日の新弟子が、先輩を差し置いて代表になるなど不思議なことだと思ってしまうのですが、これはお大師さまのお人柄が、誰の目から見てもそれほど大きかったということでしょうね。

このことは、帰国後に奈良東大寺の別当(最高管理者)になった時、東大寺のお坊さん達から暖かく迎えられる、境内に真言院を造ったということからも分かるような気がします。司馬遼太郎さんの「空海の風景」には、「東大寺では今でも『理趣経』を読んでいる。」と書いてありました。理趣経は言うまでもなく真言宗のお坊さんが、極く普通にお唱えしているお経ですね。

先年奈良に行った時、興福寺の護摩堂にお大師さまの座像が安置してありました。帰国後お大師さまは嵯峨天皇から、都の平安を祈るため東寺を任せられます。東寺は平安京の南の入り口、一番大事なところですよ。

若い頃山林で修行していたお大師さまの正直なお気持ちは、時にはゆつくりと自然に浸って座禅したりすることだったのでないでしょうか。心を磨くことも大事だからです。

そこで嵯峨天皇にお願ひして、今の高野山を賜りました。ご自分の陣頭指揮というわけには行かないものの、山上の伽藍が段々と整備されて行くのを、満足して眺めておいでだったのではと想像します。

その時から約三百年、高野山はどうなっていたでしょう。

想像すら出来ませんが、誰も住む人がなく、キツネやタヌキの住み家になっていたそうです。くどいようですが、ウソのようなこの話は本当なのだそうです。

この有り様をみて、お大師さまを慕うこと人一倍だった覚鑿上人は、お大師さまのご恩に報

いるには先ず教学の復興が大事だと、一つのテーマを立体的、徹底的に議論するという方法を選びました。

ここで出た答えを、覚鑿上人にお示しして裁可を仰ぐという形になります。このようにして論理的な訓練を続け、高野山に活気がよみがえってききました。

その後、色々のいきさつのち、本拠地を高野山に近い根来寺に移して発展します。

豊臣秀吉は、最後まで抵抗を続けた根来の僧兵を打ち破って、初めて天下統一が成ったという事実からも、根来の勢いの強さが分かります。

余談ですが、僧兵はお寺や荘園を守る侍のことで、お坊さんが武器を持って戦ったわけではありません。

当時は自分の領地は自らが守る以外にありませんでした。

根来を焼き打ちされたお坊さん達は、それぞれの縁故を頼って、奈良の長谷寺(真言宗豊山派)と、京都の智積院(真言宗智山派)に落ち着きます。根来寺と智山派、豊山派の三つの宗派を別に新義派ともいいます。

智積院が現在の東山の麓に場所を得て、覚鑿上人ゆかりの報恩講が復活しました。

十二月八日から十日までが法要の期間です。その内、十二月十日の法要を「法事」といって、報恩講の締めくくりに法要です。

期間中は全国から大勢のお坊さんが集り、知らず知らず頭が下がる荘厳な雰囲気があります。

公開もされていますから、お参りになると宜しいと思います。

上の写真は、当山での法要の一場面です。法華経如来寿量品を独特の節をつけてお唱えし、罪障消滅のため尊勝陀羅尼を繰り返しお唱えしますが、何れも興教大師覚鑿上人への報恩謝徳の心に変りありません。

こちらは十二月の最初の土曜日(午後一時半ごろから)で、非公開ではありませんので、お気付きの方はお参り下さい。



えー、最近、わが国も観光立国をめざそうというんで、観光庁というものが誕生したんだそうですね。

へー、なんでいまごろ？と思いましたが、日本人は毎年二千万人も外国に出かけるのに、日本を訪れる外国人観光客は八百万人。これじゃ、日本人のお金がどんどん外に流れていってしまいうんで、外国人観光客をたくさん呼んで取り返そうってことらしいですが、どうなんでしょうね。

それで調べてみましたら、外国人観光客が一番行きたがる国はフランスで、日本はなんと世界で二十八位だそうですね。メキシコが十位ですから、かなり低い順位ですよ。まあ、極東と言って一番遠いということもあるんでしょうがね。

今日は、そんな観光に関するお話をしたいと思いますが……。

それは、今年行われた北京オリンピックでのことでございます。

いよいよオリンピックの開会式が開かれようという時、報道センターに現われたイタリア人の老スポーツカメラマンがひとりの日本人記者に英語で声をかけました。

「君は中国人か、それとも日本人か」「日本人ですか」「そうかあ、日本人か……。オリンピックになるとな、日本人が懐かしく思い出されていけないよ、そうか、君は日本人か」白髪のカメラマンは、そう言うと、目をウルウルさせて、いまにもこぼれ落ちそうな涙をこらえています。

「どうしたんですか」「いや、なんでもない。開会式の取材が終わったら、一杯飲まないか。ここにいますから」

その人は自分の泊っているホテルと部屋番号をメモ用紙に書くと、日本人記者に渡しました。

日本人記者もそのホテルから近くのホテルに泊っていましたから、取材がすべて終わった深夜、カメラマンを訪ねて行きました。老カメラマンは喜んで彼を迎え、そこで、日本人記者は、こんな話を聞いた

たのです。老カメラマンは、いま六十九歳。もともとは短距離のランナーで、東京オリンピックのイタリア代表をめざしていたのですが、百メートル、二百メートルの両方の予選で落選して、選手を断念し、趣味だったカメラの技術を生かし、急ぎよカメラマンに転向したのだそうですね。

しかし、いくら元優秀な選手でもそう簡単にはカメラマンにはなれません。でも、オリンピックの写真がどうしても撮りたくて、なんとか取材許可をもらったそうです。ところが、旅費がありません。親から借りたお金をたよりに彼は、はるかかなたの東京を目指します。イタリアから列車を乗り継いでモスクワに。そこから、シベリア鉄道でウラジオストクに。なんとかホナトカに到着し、今度は貸客船の三等船客となって、イタリアを出てから二カ月かかって横浜港に着きました。

「やっつと、日本に着いたぞ」

荷物をまとめ、夕映えの中、タラップを降り、日本に第一歩を記した、その時です。「ワーツ」という歓声をあげながら、ぼろぼろの服を着た彼を五人の日本の小学生たちが囲んだそうです。

「なんだ！なんだ！」彼は驚きました。外国の観光地でよく見かける物乞いの子供たちに囲まれたのかと、彼はとても警戒しました。

ところが、その子たちは大変に礼儀正しく、びよこんとお辞儀をすると、代表らしきひとりが新聞紙で折った小さな日本人形をくれたそうです。

「グラッチェ、グラッチェ」

なんだかわからないうちに、その子たちはまた「ワーツ」と同じような歓声をあげて夕焼けの波止場から消えて行ってしまいました。それから三十年後、イタリアを代表するスポーツカメラマンになった彼は、大阪で行われた世界陸上の取材で、二度目の来日をしました。もちろん、その時は飛行機で選手団と一緒にやってきました。その時に、先の横浜港での思い出を日本人新聞記者に話しました。記者はそのことを新聞に書く。

すると、どうでしょう。滞在中にひとりのサラリーマンがやってきました。

「新聞に書かれていた少年は、僕たちだと思えます」

彼は、激しくその若い会社員を抱きしめました。

「ありがとう、ほんとうにありがとう。あの時、ひとりぼっちで不安でいっぱいだった僕は、どれだけ君たちに生きる勇気をもたらしたかわかりやしない。カメラマンとして生きる自信もついた。でも、どうして、見ず知らずの僕にプレゼントをしてくれたんだい？」

若い会社員は、こう答えたそうです。

「先生が二期期の初めに、こう言ったんです。『皆も知っているように、東京オリンピックがこの十月に開かれる。世界の人たちが船で、この横浜港に降り立つだろう。日本に初めて来る人も多いだろう。この学校は港に近い。だから、君たちはグループ同士で何かプレゼントを考えて、そうした人々たちを大桟橋で迎えてあげようじゃないか』って。船が着くたび行ったんですけど、なんだか、豪華客船の人たちには、気おくれしちゃって。ほら、僕たち、家がすっごく貧乏で、汚い格好をしていたし……そしたら、貨物船みたいな船から、あなたが降りてきたから……」

「そうだったのか、先生、ありがとう、グラッチェ、グラッチェ……。日本の教育はなんと素晴らしいんだ！」

涙もろいのでしよう、しわだらけの頬を伝う老カメラマンの涙は止まりませんでした。

東京オリンピックは昭和三十九年です。いまから四十四年も前。あの頃の学校の先生も生徒も、立派に観光立国日本の先頭に立っていたわけですね。

MOCKU出版という出版社がありました。最近おやめになったとのことで、これからは新しい三遊亭鳳豊師匠の人情小断をお伝えすることが出来なくなり、寂しい思いをしております。



せながら納得しました。それで、つい先日、ご希望通り永代供養墓密巖塔に納骨致しました。御先祖様も毎日の勤行を聞きながらゆったりとお休みなれました。▼今月の野草はリュウノウギク【キク科キク属】私たちが野菊という仲間、春先には山菜として浸し物などにして食べますね。名前の由来はその香りが竜腦に似ているからだそうです。秋の終わり、寧ろ冬近しを思わせる、どこことなく日の光が弱くなったころ、山のへの岩場のような所を好んで咲くようです。2016.12.09 龍渉

▼毎年、どうもせりふが決まっているようで、些か気が引けるのですが、「光陰矢の如し」の実感です。▼元朝護摩の受付です。例年通り、護摩札のお申し込みを受け付けております。お一人お一人の顔を思い浮かべながら、心を込めて一体ずつお作りする…小さなお寺ならではの“御利益”です。沢山の皆様のお申し込みをお待ちしております。▼“墓じまい”について。「お寺がある限り、代行してお参りしますから、墓地はそのままにしておいたら如何でしょうか」とお伝えしたところ、「それではどこまで行っても落ち着かないのです。」と言われて、成程立場が違うとそういうこともあるなあと、遅れば

## 余滴